2009年10月25日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙6章12～23節

説教題：永遠のいのちを下さる神

1　二つの疑問

ローマ人への手紙を読んで、読みやすいと思う方は少ないでしょう。たとえ読み通したとしても、わからないところがいくつか残って、消化不良をおこしそうになります。それほどの難しく感じるローマ書を、この二千年間、世界中のキリスト者が大切に読み継いできたことに、私はいつも驚きを覚えます。

今朝の箇所にもいくつかの疑問を感じる箇所があります。今朝はその中から二つを取りあげます。まず一つめは、12節です。「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。」そう言われても、それが簡単にできたなら誰も悩まない。簡単なことではないからみな悩んでいるのではないか。いったいどういうことだろうか。それが一つめ。

そして二つめは、19節の後半。「今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」「あなたがたは、努力して聖くなりなさい。」そんなふうに聞こえてしまいます。先ほどの疑問と同じように、それができたなら誰も悩まない。簡単なことではないからみな悩んでいる。そう反発したくなります。

パウロは、「行いではなく、ただ信じる信仰によってだけ私たちは救われるのだ」と説きました。しかし、ここではまるでこうしなければ救われないと言われているように聞こえます。いったいどういうことか、考えてまいります。

2　「罪の支配にゆだねるな」と言われても

（1）過去：罪の奴隷であった

まず最初の疑問から見ていきます。パウロは12節のことを説明するためにいろいろなことを言っています。私たちが過去どんな状態だったか。今はどういう状態か。そして未来はどうなるのか。そんなふうに切り分けて整理し直します。

まず過去の状態についてですが、20節にこうあります。「罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。」

何と答えるでしょうか。「もちろんあります。まじめに働いて家族を養い、世間からも後ろ指を指されるようなことはしてこなかった。そのようなものを良い実と言うのではないですか。」目に見えるところでは確かにそうかもしれません。しかし神は、目に見えないものをご覧になる方です。ところが私たちは、その反対です。目に見えないものならだれにもわからないと考えます。その代わり目に見えるところ、世間様の目を気にします。

皆さんはこんな経験はないでしょうか。例えば拾った財布をそのまま自分の懐に入れてしまう。後ろめたい心も感じないわけではないけれど、「これくらいいいじゃないか」と言い訳をします。会社で働いているのであれば、上司がいないところでは、少しさぼっていよう。「だれだってやっている」と言い訳をします。家の外に出てみると、妻以外の女性に視線が移ります。いっしょにお茶でも

飲もうかと考える。「これくらい何も問題がない」と自分に言い聞かせます。「義については、自由にふるまっていた。」とは、このような生き方です。

そんな生き方をしていても、自分では何かの奴隷になっているという自覚はまったくありません。むしろ、自分はしたいことを自由にしていると思っていました。他人様に迷惑をかけない限り、したいことをして何が悪いと開き直っていました。

ところが聖書によれば、それはみな罪の奴隷となった者の生き方だと言うのです。そして畳みかけるようにこう問いかけるのです。「あなたはそのような生き方をしていて、何か良い実を得たでしょうか。」

私たちは、だれにも迷惑をかけなければ何をしても構わないと考えてきました。そうやって好き勝手に生きたとしても、そしてどんなにこの世で成功し、世間から賞賛を得ようとも、人は平等に死にます。当たり前の事実なのに、私たちはあえて考えようとはしませんでした。まだまだ遠い先のことだと、先延ばしにしていただけのことです。なぜ先延ばしにしようとするのか。恐ろしいからです。その恐ろしいと感じていること、まさにそのことが、奴隷であることをあらわします。私たちは死の奴隷となっています。その死は罪から来ていますので、結局私たちは罪の奴隷であることを認めるしかありません。

（2）現在：罪から解放されて義の奴隷となっている

では、どのようにしたら奴隷状態から解放されるのでしょう。昔の人たちは、人間を苦しめている死から逃れる方法を必死になって考えようとしました。決して死ぬことのないそんな薬がどこかにあるのではないかと探し出そうとしました。科学や医療の力で、少しは寿命は延びたかもしれません。でも限界があります。まして死んだ者を生き返らせることなど、それは絶対に不可能なことだと考えられています。罪から来る報酬は死である。この事実を人間は絶対に乗り越えることはできません。

しかし神はそうではありません。神は罪に苦しむ私たちを救おうとされ、罪から解放される道を備えてくださいました。17 節で「伝えられた教えの基準に心から服従し」とあります。パウロのことばで詳しく言い直せばこういうことです。「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められる。」（3：24）ただ救い主を私たちの主であると信じる信仰によって、私たちを苦しめている罪は取り去られ、私たちは恵みの賜物として永遠のいのちをいただく。今は私たちは義の奴隷なのだと言います。

義の奴隷と聞くとびっくりしますが、もちろん不自由な奴隷ということではありません。私はこれをパウロ流の冗談だと考えています。

（3）未来：罪はあなたがたを支配することができない

ここまでの説明を聞いても、多くの方は「しかし」と言うでしょう。罪から解放されて今は義の奴隷です。ことばはすばらしいのですが、でも実際はどうなのか。では私たちは死ななくなったのですか。いいえ、クリスチャンであろうかなかろうが全員死にます。信じて何が変わったのか。何も変わらないじゃないか。信じてもやっぱり罪は私たちを支配しているではないか。罪の支配にゆだね

るなと言われても、そんなことはできないことだ。

パウロという人は、皆さんもおわかりのように非常に理詰めで物事を語る人です。曖昧なことなど一切言わない人です。パウロが矛盾したことを言うはずはありません。

このことを理解する一つの鍵が 14 節にあります。「というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。」

パウロの手紙はギリシャ語ということばで書かれています。それを私たちは日本語で読むことができます。これは大変感謝な事です。ところが一方、翻訳作業は本当に難しい。この箇所もそうです。「罪はあなたを支配することがないからです。」こう書かれていると、今現在、すでに私たちは罪に支配されてはいない。もうそういう状態に移されているのだと、とってしまいます。ところが原文を見るとそういう意味ではない。わかりやすく直訳します。「というのは、罪はあなたがたを、やがてこの先支配することがなくなるからです。」

今現在のことではなくて、これからもう少し先に起きる未来の出来事だと言っているのです。そうしますとパウロの言いたいことはこのようなことです。

これから先やがて、罪はあなたがたを支配できなくなる。もうそのときが間近に近づいています。そのときが来るとどうなるか。あなたがたが仮に罪を犯したいと考えたとしても、もう罪を犯すことなどできなくなってしまう。「できなくなってしまう」と言うとまるで不自由になるかのように聞こえますが、そうではないですね。もう少し具体的に言えばこんなことです。私たちは今は病気にかかるような弱い体しかありません。病気という不自由さで苦しんでいます。でも、やがて私たちは罪の支配を受けないときがやってくる。その時初めて私たちのからだはもう病気になることはない。死ぬことなどない。例え病気になりたいと考えても、病気になれない。死ということさえ思い起こすことなどなくなる。病気になれないから不自由になったとはだれも思いません。むしろ、ああよかったと思います。それがこれから先に起こることです。

パウロは、私たちを苦しめるために厳しく命令しているのではありません。これから先のことを考えてごらんなさい。罪はあなたを支配できない日がやってこようとしています。それなのに、あなたはまだ自ら進んで罪を犯しても大丈夫だと思っているのですか。よく考えてごらんなさい。あなたはもう罪から解放されていると宣言されているのですから、罪の奴隷の時のような生き方を続けなくてもいいのですよ。むしろ、やがて来る日に備えて、罪から離れ、聖い生き方というものを考えてみたらどうだろうか。

３　「聖潔に進みなさい」と言われても

それが 19 節後半に言われていることにつながっていく訳です。「今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」

私はへそ曲がりですから、こう言うことばを聞くと反発しておりました。どうせ自分は、聖い生き方のできないだめなクリスチャンだと落ち込みました。

先ほども触れたように、パウロが私たちを落ち込ませるためにこんなことを言うはずはありません。結論から申し上げると、実は私たちにとってはいつもしているごく当たり前のことを言っているに過ぎないのです。

皆さんは、自分の姿を一切ふり返らないでしょうか。そんなことはないですよね。皆さんは正直に自分の姿をふり返ろうとしています。そして自分の至らなさ、自分の罪、自分の弱さを見つめようとしています。すぐに罪がなくなるわけではありません。すぐに自分の弱さが解決されるわけではない。それでも、「私はこんな自分なんです」と自分の弱さを告白し合っています。

だれでも、聖書のみことばの通りに生きられればと願います。でも、できません。信仰が弱いからできない。祈りが足りないからだとか、そんなふうに思って自分を責めてきたかもしれないけれど、そんな自分を責める必要はない。

聖書にはこんな約束が記されています。ヨハネの手紙第一1章9節。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しいかですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

「聖潔に進みなさい」とはこのようなことではないですか。

4　ささげていく歩み

私たちは聖く生きたいと願ってもできません。だから、神のひとり子が肉のからだを取ってくださって、そのからだを十字架でささげてくださいました。そのことについてパウロは言っています。8章3節。「神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」

キリストが十字架で、そのからだをささげてくださいました。私たちのからだが弱いことを知ってくださって、そのからだを十字架にささげてくださいました。

私たちは自分の体の弱さを見て、悲しくなります。もっと強い体であったならと思います。この体の中にあるいろいろな情欲が、罪に走らせることを私たちはどうすることもできない。あるいは、自分のからだを守ろうとして、自己中心的な事をしてしまったり、言ってしまったりもする。そうしない方がよいとわかっていてもそうせざるを得ない。そこで苦しい思いをします。

でも大丈夫です。神はそんな私たちをご存じです。最初からわかっていてくださる。こんな私たちを救いたいと心から願って、主は十字架でご自分をささげてくださいました。

今朝の箇所で何度も「ささげなさい、ささげなさい」と繰り返されています。実は、もう神のほうからささげられているのです。私たちを罪という奴隷から解放するためにそうしてくださいました。私たちを罪からきよめるためにしてくださいました。

そもそも、イエスが十字架におかかりにならなければならなかったほどの、私たちなのです。最初から、聖い生き方などできるはずはない。できるはずがないのに、聖い生き方をしなければと頑張ろうとしてきました。

頑張る必要はありません。私たちにできることは、自分が聖く生きられないものであることを主に申し上げていく。ただそれだけではないでしょうか。それが「その手足を義の奴隷としてささげなさい」と言うことの意味です。

主は、その告白を喜んで聞いてくださる。それが私たちに与えられているすばらしい恵みです。今週もその恵みの十字架を仰ぎ見ながら歩んでまいりましょう。